

大岡昇平『堺港攘夷始末』論

——単一の「物語」への回収を拒否する歴史——

尾 添 陽 平

一

大岡昇平『堺港攘夷始末』（中央公論文芸特集）一九八四年秋季号（一九八八年冬季号）は、一九八八年十二月二十五日の大岡の死によって未完に終わった歴史小説である。大岡は、『堺港攘夷始末』執筆に先立って一九七五年に、『堺港攘夷始末』と同じく、慶応四年（一八六八）二月十五日、堺に勃発した土佐藩警備兵とフランス水兵との紛争（堺事件）を扱った森鷗外の歴史小説『堺事件』（新小説）一九一四年二月）を批判している⁽¹⁾。

さらに遡れば大岡は、一九六一年の『蒼き狼』論争で、井上靖『蒼き狼』（『文藝春秋』一九五九年十月～一九六〇年七月）を批判している。一九六一年の『蒼き狼』論争以来、大岡は、幾度か歴史小説について言及し、一九七四年八月に『歴史小説の問題』（文藝春秋社）として一連の歴史小説への言説を単行本にまとめ、刊行している。一連の歴史小説への言説の中で、大岡は、東西の歴史小説について言及し、「歴史小説家の責任」⁽²⁾——小説家がどのように歴史を捉え記述しているか、つまり、歴史小説における歴史記述のあり方について論じている。また、歴史小説への言説と

呼応するかのよう実作においても、『天誅組』（産経新聞）一九六三年一月、六四年九月、『将門記』（展望）一九六五年一月）『レイテ戦記』（中央公論）一九六七年一月、六九年七月）など歴史を題材にした作品を発表し、自らの理想とする歴史記述を實踐しようとしている。大岡は、歴史記述という問題に大きな関心を持っていたのである。

本稿では、まず、一九六一年の『蒼き狼』論争から一九七五年の『堺事件』批判までの、大岡の歴史小説への言説を見た上で、大岡が、どのような歴史記述を評価し、あるいは批判しているのか見ていきたい。そして、大岡が歴史を題材に扱った最後の作品である『堺港攘夷始末』において、実際に大岡は、歴史をどのように記述しているのか、大岡が批判した『堺事件』と比較をした上で考えてみたい。

- 註(1) 大岡昇平は、一九七五年に『堺事件』疑異（『オール讀物』一九七五年三月）並びに『堺事件』の構図——森鷗外における切盛と捏造——（『世界』一九七五年六月、七月）を発表し、『堺事件』を批判した。大岡は、『堺事件』疑異の中で、一九七五年当時『堺事件』への評価は、『よくできた歴史小説』という評価が一般である」と述べている。しかし実際は、大仏次郎『天皇の世紀』（第八卷、朝日新聞社、一九七一年十一月）の堺事件の記述に引用されたが、大岡が『堺事件』の構図で述べているとおり、「個別研究は少ない」状態であった。つまり、『堺事件』を最初に本格的に論及し、批判したのは、大岡昇平である。
- (2) 大岡昇平「歴史小説と批評」（『文学界』一九六四年十一月）、「歴史小説の問題」に収録される際、「現代史としての歴史小説」に改題・改稿された。

二

大岡が、最初に本格的に歴史小説について言及したのは、一九六一年の『蒼き狼』論争の時である。この時大岡は、成吉思汗のユーラシア大陸遠征を描いた井上靖の歴史小説『蒼き狼』を批判した。

大岡は、『蒼き狼』について「井上氏はその主人公を氏が現代の動物小説から得た狼の觀念に引きよせようとしている。狼の原理は全篇に繰り返され、氏の小説家の手腕によって、作品に一応の統一を与えているが、原理には現実性がないから、統一はそらざらしく、いたるところ破綻せざるを得ない」⁽¹⁾と述べた。つまり大岡は、『蒼き狼』の記述が、成吉思汗が「狼の原理」に突き動かされてユーラシア大陸遠征を行ったとする「物語」だけを立ち上げ、ユーラシア大陸遠征を、その「物語」の構図だけに回収する記述であり、そのような記述の結果、『蒼き狼』は成吉思汗によるユーラシア大陸遠征という歴史を描き得ておらず、歴史小説として破綻している、と批判したのである。

『蒼き狼』論争から三年後、一九六四年に「文学界」に掲載された一連の歴史小説への言説⁽²⁾の中で、大岡は以下のように述べている。

歴史に死んだ子を惜しむ母親の歎きを見るのは正しく、司馬遷の歴史意識に、宮刑を受けた者の汚濁の意識を見るのも、間違いではあるまい。しかしこれらの感情的理由から、歴史全体を律しようというのは、幾世紀にわたる修史家の地下作業、過去を詳細に知りたいという自然の要求を無視することになる。一民族が母親の歴史だけで生きていたら、確実に亡びてしまうだろう⁽³⁾。

大岡は、「歴史に死んだ子を惜しむ母親の歎き」「司馬遷の歴史意識に、宮刑を受けた者の汚濁の意識」を見るのは正しいとはしている。しかし、「母親の感情」「汚濁の意識」といった「感情的理由」で「歴史全体を律しよう」とすること、すなわち、「感情的理由」に歴史を回収するのは、歴史の本質を理解しようとする「幾世紀にわたる修史家の地下作業」を無視することになると述べる。そしてある民族が、歴史を、「母親の歎き」だけから物語り、歴史を記述する際に、「母親の歎き」によって物語られた「物語」の構図に回収する記述方法を採用するならば、そのような民族は「確実に亡びてしまう」と指摘する。つまり大岡は、「感情的理由」は歴史を物語る上での一側面でしかなく、

歴史全体を律し、回収地点となりうるようなものではない、歴史を、一つの「物語」の構図に回収するべきではない、と述べているのである。

一方で一九七四年に発表した「歴史小説の問題」において、大岡は、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーの『スペインの短い夏』（一九七二年・野村修訳 晶文社 一九七三年二月）を評価する。

スペイン戦争の歴史に重大な影響を及ぼした二指導者の暗殺を扱ったH・M・エンツェンスベルガーの『スペインの短い夏』も別の書き方の例を提供している。その指導者の死の状況が、文献や証言の山の中で、解き難くもつれて、何が事実かわらなくなっていることを、豊かな文献を駆使して実証してみせた作品である。そして作者は、昨年来日した時、或る対談の席で、この作品は純粹のドキュメンタリーではなく、むしろ小説的要素が多いといっている⁽⁴⁾。

スペイン戦争時の二指導者の暗殺事件を扱った『スペインの短い夏』という「小説的要素が多い」と作者エンツェンスベルガー自身が述べている作品について、大岡は、「指導者の死の状況が、文献や証言の山の中で、解き難くもつれて、何が事実かわらなくなっていることを、豊かな文献を駆使して実証してみせた作品」と述べる。『スペインの短い夏』は、一指導者の暗殺による死という歴史を物語る時、一つの「物語」を立ち上げ、歴史を、その「物語」の構図に回収するという記述方法を採用せず、多くの文献を駆使することによって物語ろうとした。しかし一指導者の死の状況は、結局「何が事実かわらなくなつて」おり、『スペインの短い夏』には、ただ二指導者の暗殺という歴史だけが、動かしがたい事実として存在しているのである。大岡は、『スペインの短い夏』のような歴史小説の歴史記述のあり方を、歴史の「別の書き方の例を提供している」と評価する。

以上のように大岡は、一連の歴史小説への言説の中で、安易に一つの「物語」を立ち上げ、歴史を、その「物語」の構図に回収する記述を持つ歴史小説を批判する。一方で、豊かな文献を駆使するなどして、歴史を、複数の側面か

ら物語り、歴史の多面性を実証し、結果、何が真実であるのかわからない、ただ歴史だけが動かしがたい事実として存在している、とする歴史小説に対しては、歴史記述の方法の一つを示している、と評価するのである。

さて大岡は、一九七五年に『堺事件』を、これまでの彼の歴史小説への言説の中で批判してきた歴史小説と同様である、すなわち、安易に一つの「物語」を立ち上げて、歴史を、その「物語」の構図に回収する記述を持つ歴史小説である、と批判した。

大岡の『堺事件』批判は、大岡自身によって以下のようにまとめられている。

・全体として、鷗外の美談作りの意図が露骨で、歴史小説の方法として疑問がある⁽⁵⁾。

・一方には無法な洋夷としてのフランス人がおり、他方これを排除せんと決意し、皇国意識に目醒めた土佐藩士がいる。彼等は洋夷の圧力によって切腹しなければならなかったが、正にその切腹によって洋夷を遁走せしめた。洋夷に対して謝罪はしないうが、切腹の場に臨み、無言のうちに、彼等の不幸を見守る、天皇家があった。封建的土佐藩は助命された九士を流罪にしたが、天皇制は幼帝即位を機に特赦する仁慈と権威を持っている。鷗外が捏造したこの構図ほど山県体制に役立つものはなかったであろう⁽⁶⁾。

吉田潤生は、大岡の『堺事件』批判の動機を、「『レイテ戦記』の執筆と完成にあった」と指摘、「『堺事件』の作者鷗外の位置は、レイテ戦の事実を都合よく書き替える高級将校のそれになぞらえることができる」「兵士の死をイデオロギーによって美化すること、そしてそうした作者鷗外を偶像化することは、大岡には認めがたいことだった⁽⁷⁾」と述べている。大岡は、『レイテ戦記』のあとがきにおいて「旧職業軍人の怠慢と粉飾された物語に対する憤懣⁽⁸⁾」があった、と述べる。大岡は、旧軍人たちによるレイテ戦の記述が、レイテ戦を美化する「物語」を立ち上げ、レイテ戦を、その「物語」の構図に回収する記述であることを批判している。そして『堺事件』が、旧軍人たちによって記

されたレイテ戦と同様に「全体として、鷗外の美談作りの意図が露骨」であり、『堺事件』の歴史記述は、「無法な洋夷としてのフランス人」を「皇国意識に目醒めた土佐藩士」が、「切腹」という命を代償にした行為によって遁走せしめ、天皇家は、「切腹」した土佐藩士の「不幸を見守」り、「助命された」土佐藩士を「特赦する仁慈と権威を持つている」という殉国の「物語」を立ち上げ、堺事件を、その「物語」の構図に回収する記述である、と批判するのである。

『蒼き狼』論争から『堺事件』批判の時点まで、大岡は一貫して、ある一つの「物語」を立ち上げ、歴史を、その「物語」の構図に回収する記述を持つ歴史小説を批判してきた⁹⁾。

大岡は、『堺港攘夷始末』について「諸史料を比較しての、私なりに事件を再構成したもの」¹⁰⁾と述べている。『堺港攘夷始末』は、『堺事件』とは違う方法で堺事件を記述していく¹¹⁾。『堺港攘夷始末』は、『堺事件』に対抗する形で、『堺事件』とは違う記述方法を模索しながら書かれた歴史小説であるといえる。そして『堺事件』批判は、その模索の出発点として位置付けられることができるのである。以下本稿では、『堺事件』の記述方法との比較によって、『堺港攘夷始末』における歴史記述の方法を明らかにしたい。

註(1) 大岡昇平「常識的文学論・『蒼き狼』は歴史小説か」(『群像』一九六二年二月)

(2) 大岡は一九六三年六月から六四年十一月にかけて「文学界」に十三回連載した『現代小説作法』のうち八回(六三年九月・十月、六四年三・四・六・七・九・十一月)、歴史小説について言及している。

(3) 大岡昇平「歴史小説と批評」(前掲)

(4) 大岡昇平「歴史小説の問題」(『文学界』一九七四年六月)

(5) 大岡昇平「『堺事件』疑異」(前掲)

- (6) 大岡昇平『『堺事件』の構図——森鷗外における切盛と捏造——』（前掲）
- (7) 吉田潤生「大岡昇平の人と作品」（『鑑賞日本現代文学』26 大岡昇平・武田泰淳）所収、角川書店、一九九〇年十二月）
- (8) 大岡昇平『レイテ戦記』あとがき（『レイテ戦記』所収、中央公論社、一九七一年九月）
- (9) 柴口順一は「大岡昇平における歴史（十六）『堺港攘夷始末』（帯広畜産大学人文社会科学論集）一九九八年十月、『大岡昇平と歴史』所収、翰林書房、二〇〇二年五月）において、『堺事件』批判時の大岡の言説について、『蒼き狼』論争から「歴史小説の問題」に至るまでの、歴史と文学あるいは歴史記述と歴史小説に関する発言を越える新たなものは、今回の大岡の発言には認められない」と指摘している。
- (10) 大岡昇平『『堺事件』批判その後』（『群像』一九七七年九月）
- (11) 大江健三郎は「多面的なエクリチュール」（『大岡昇平全集13』所収、筑摩書房、一九九六年一月）において、「堺事件を実際に物語ってゆくことになると、大岡の手法は、（中略）多声的」と指摘している。

三

『堺事件』は、「事件を展開させた動力は、きわめて特殊な状況にあった朝廷政府とフランス公使をはじめとする外国の外交団との力関係にあったわけだが、鷗外はそれをも消去して土佐藩兵士に叙述を限定し、立体図を平面図に変えてしまった」⁽¹⁾（亀井秀雄）という指摘がされている『堺事件』批判を出発点とする『堺港攘夷始末』は、『堺事件』に記述されることのなかった事象である堺事件の勃発した慶応四年二月当時の政治力学、具体的には、新政府とフランスを始めとする欧米列強との関係を記述していく。

前日十四日、西本願寺で、大坂裁判所総督醍醐忠順、外国事務総督東久世通禧、伊達宗城が出席して行われた諸国公使との会見の主要議題であった京都における天皇謁見については遂に決定に到らなかつた。親幕派のフランス公使ロツシュはむろん反対であり、イギリス公使パークスは賛成、というより推進者であつたが、それだけに積極的な意向を表明せず慎重に大勢静

望の態度をとった。オランダはイギリスに同調すると言明したが、アメリカ、イタリア、プロシヤは、ロツシユほどでもないまでも、新政府の実力になお懐疑的であった。

慶応四年二月当時、新政府は、徳川幕府ではなく自分たちが日本の正当な政府であると欧米列強に承認してもらうため、諸国公使の天皇謁見を政治外交日程に入れようとしていた。欧米列強のうち、諸国公使の天皇謁見に賛成・推進の立場をとるのはイギリスと、イギリスに同調するオランダの二カ国のみ、しかし、この両国とも表向きは慎重に大勢観望の態度をとっていた。アメリカ、イタリア、プロシヤの三国は新政府の実力に懐疑的、何より親幕的態度をとるフランス公使ロツシユの反対にあつて、諸国公使の天皇謁見は、日程を決めるどころか、実現が危ぶまれていた。二月十四日、西本願寺において新政府外交当局と諸国公使の会見が行われ、その翌日、堺において、堺港を警備する土佐藩士と、天皇謁見に反対の立場をとるフランスの水兵との間に紛争が生じ、フランス水兵十一人が土佐藩士に射殺された。

・宗城の苦衷、察するに余りあるが、またイギリスは終始宗城らに好意的で、適切に助言しはげましているさまが察せられる。

・折柄、京都でイギリス公使館付医師ウイリスの治療を受けていた山内容堂は、十八日遺憾の意を表し、ウイリスに同行していたイギリス公使館書記官ミットフォードにロツシユと諸外国の代表に伝えるよう依頼した。

以上のように『堺港攘夷始末』は、堺事件処理の過程で、イギリスが、新政府外交当局に「適切な助言し励まして」いることを、また新政府側も、土佐藩前藩主山内容堂がイギリス公使館書記官ミットフォードに、ロツシユと他の諸外国の代表に遺憾の意を伝えるよう依頼しているように、イギリスの力を借りていることを記す。堺事件処理の過程で、新政府が、親新政府の態度を取るイギリスと密接な関わりを持っていたことがわかる。

なお宗城はすでに二十二日、兵庫で祝砲のことを告げられ、帰途パークスを訪ねて、応砲を発する必要はない、と教わっている。すべては手探りの外交であった。二十四日、宗城は御門よりの贈物として、錦布をパークスに手交している。

新政府外交当局は、堺事件処理のためフランス艦船に謝罪に訪れた山階宮に対する祝砲への応砲を発する必要なことまでも、イギリス公使パークスに教わっている。そして、『堺港攘夷始末』に付せられた久留島浩・宮崎勝義作成の「注」の24⁽²⁾によって否定されていることではあるが、『堺港攘夷始末』本文は、二月二十四日に、伊達宗城がパークスに、「御門よりの贈物」である「錦布」を「手交している」ことを記す。堺事件処理をめぐる新政府の外交は、すべて「手探り」であり、新政府の後ろには、イギリスの影が見え隠れする。堺事件とその処理を、日仏関係の構図だけで物語り、その「物語」の構図に回収することを不可能にする、別の「物語」の構図を立ち上げている。

一方で、堺事件の処理により、二月十五日の時点で「ミカドの政府はクーデタ政権と認められるから、謁見には応じられない」と発言し、天皇に謁見するための京都招待に断乎として拒否していたロッシェではあるが、二十三日「十一士が一週間の間に処刑されたことにより、新政府の認め」るに到る。そして、二十五日「堺事件の迅速な処理によって遂に折れて」、二月晦日に京都御所に参内、天皇に謁見することが決定する。堺事件とその処理の過程から、新政府の政治外交日程上の懸案の一つが解決されるに到る、という「物語」の構図が立ち上がる。

また、『堺港攘夷始末』は、公使の参内日の二月晦日にパークスが、「天誅組の乱」(二八六三)に参加した経験をもつ三枝翁らによって襲撃された事件を記す。

しかし、三枝の処分は早かった。(中略)外国人を殺害、また殺害しようとした者を、神戸、堺の例のように名誉の刑である切腹ではなく、武士の資格剝奪の上、斬首、梟首の加辱刑に処することが決定した。パークスとロッシェはそれぞれ自分の発議と自慢しているが、これは前に見たように、二月二十四日山階宮のヴェニス号訪礼の際、ロッシェと伊達宗城の間で話合

われたことである。この件はロッシユの勝ち。

堺事件処理の過程で、ロッシユの發議によって、これまで外国人を殺害、あるいは殺害しようとした者に許されていた名誉の刑である「切腹」が許されなくなり、「パークス襲撃事件」以降は、武士の資格剝奪の上、「加辱刑」に処すということに変更された、と記す。堺事件によって、外国人を襲撃した者への刑罰の方法も変化したのである。

『堺港攘夷始末』は、『堺事件』に記述されることのなかった、堺事件当時の新政府とフランスを始めとする欧米列強との関係を記述する。様々なレベルの事象を記述することにより、堺事件を、堺に勃発した土佐藩警備兵とフランス水兵の局地的な紛争、というレベルで回収することは不可能になる。堺事件の起きた慶応四年二月当時の新政府を取り巻く国際環境を含めた様々なレベルの事象を記述することにより、堺事件勃発とその処理をめぐる複数の「物語」が立ち上がり、『堺港攘夷始末』を形成していくのである。

註(1) 亀井秀雄「歴史」と歴史と小説の間」(『文学』一九九〇年四月)

(2) 久留島浩・宮崎勝義『堺港攘夷始末』注(『堺港攘夷始末』所収、中央公論社、一九八九年十二月) 24は「伊達宗城御手帳留」二月二十四日条の原文は、「京ヨリ三条(実美) 文参り候。一、英公使へ、内々尽力ニ付、錦下サレ候事」とある。すなわち、「三条から書簡が来て、パークスに錦布が下賜されることが決まったと伝えて来た」というのが正確なところであり、この日に錦布が手交されたのではない。」と『堺港攘夷始末』本文の記述の誤りを指摘している。

四

『堺港攘夷始末』において「わが主人公」と称される土佐藩六番隊長・箕浦猪之吉を、『堺事件』は、「攘夷はただこの男の本領であつたのである」と記述する。『堺港攘夷始末』は、この記述を「軽蔑的評価」と批判した上で、

箕浦に関する複数の「物語」を立ち上げていく。

『堺港攘夷始末』は、万延元年（二八六〇）に箕浦が、容堂の前で「洋人航海凶に題す」という「攘夷」の詩を作ったことを記すなど、箕浦が「攘夷」の持ち主であることは否定していない。しかし『堺事件』のように、「攘夷はまさにこの男の本領であつたのである」と、箕浦をいかにも時代遅れの思想の持ち主であるかのように記述するのではなく、「慶応三年兵庫開港、四国艦隊の大坂湾侵入以来の京坂の状況には、安政、文久とは違った危機感があつた」と当時の日本を取り巻く国際環境を記し、堺事件当時における箕浦の「攘夷」が、当時の国際環境を踏まえての「攘夷」であつたことを記す。そもそも『堺港攘夷始末』において、堺事件当時の「攘夷」は、井伊直弼が勅許を得ずして諸外国と条約を結んだ安政年間の「攘夷」とも、生麦事件の起きた文久年間の「攘夷」とも異なるものである、と記述されている。「攘夷」は、時代の位相によつて異なるものであり、安易に何かの回収地点となりうるようなものではない。

一 気性が激しかったのは、その二月十五日の言動が示している。当時、数え二十五歳、それまでに妻を二人離別している。家は山崎闇齋、浅見綱齋に連る崎門学派で、即ち君主は天に則つて民を治むべきであつて、道を外してはならない。君側の奸の献策あるとして、決断を誤つた君主は君主の資格はないのであつた。／（中略）日本の武家政体が永く続いたのは、天皇と撰関家とその徳を失つたためである。いま幕府徳を失う。しかし天朝もこれを踏襲すれば、その道理は立たないというのが、箕浦の考えだつたらう。／しかし彼の言動を、あまりその思想において見ると間違つてくるだらう。

箕浦の思想を形成したのは、代々学をもつて山内家に仕えた箕浦家の家学とされる「崎門学派」の思想、すなわち「君主は天に則つて民を治むべきであつて、道を外してはならない。君側の奸の献策あるとして、決断を誤つた君主は君主の資格はない」という思想であつた。箕浦の考えは、「日本の武家政体が永く続いたのは、天皇と撰関家がそ

の徳を失つたためである。いま幕府徳を失う。しかし天朝もこれを踏襲すれば、その道理は立たない」というものである。「攘夷」の持ち主である箕浦が、「天朝」が開国和親に傾く時、開国和親こそ「君側の奸の献策」であり、その献策を阻止すべく「攘夷」を実行に移した、と見ることは可能である。しかし「彼の言動を、あまりその思想において見ると間違ってくるだろう」と記す。箕浦を「思想」だけに回収してはならないとし、「思想」とは別に、箕浦の「気性が激しかった」ということも記している。

また箕浦は、堺事件当時土佐藩にあつて、「板垣ら討幕派に与せず、佐幕派にも目された」人物であつた。しかし、当時土佐藩において、藩主は「すでに実力のない帽子のような存在になつて」おり、藩の実権は、箕浦が与することになつた、薩摩と討幕の密約を結んだ板垣退助ら討幕派の手の中にあつた。土佐藩の政治力学の中で、「佐幕派」と目される箕浦は反主流派であり、政治的不満分子である。

この時、箕浦が攘夷実行によつて、天皇謁見の大勢を覆そうとする意向があつたかどうかは、きめられないことである。しかし瀧善三郎の切腹を知つて、自分一人腹を切ればすむ、と思つていたとしたら、それぐらいの決意をすることはまったく不可能ではない。

政治的不満分子である箕浦が、諸国公使の「天皇謁見」という当時の政治外交日程を「覆そうとする意向」をもつて、フランス水兵に対する射撃命令を出したことは「きめられない」とは一応記述しながら、「瀧善三郎の切腹」、すなわち、神戸事件^①とその処理をうけて、「それぐらいの決意をすることはまったく不可能ではない」とも記す。政治状況への判断から、箕浦が射撃命令を出したことを否定はしていない。

彼の口から「射て」の声が出ることは、それまでのパリス測量隊の動きを見ていた結果、彼の内部に積つていた感情のはけ口として、可能である。

その一方で、箕浦が「感情のはけ口」として射撃命令を出した、ということの可能性にも言及し、箕浦はなぜ射撃命令を出したのか、一つの「物語」の構図への回収を不可能にしている。

『堺港攘夷始末』は、箕浦の思想、性格、政治的立場並びに判断、感情など、箕浦像を物語る彼の複数の側面を記述していく。箕浦が単に「攘夷」の持ち主であったため、フランス水兵に射撃命令を出した、ということだけではなく、箕浦を物語ることでできる複数の側面から、彼が射撃命令を出したことを記述しているのである。

箕浦は死の際に「除却洋気答国恩／決然豈可省人言／唯令大義伝千歳／一死元来不足論」という七言絶句を残している。『堺事件』はこの詩を引いて『堺事件』では「洋氣」を「妖氣」、「令大義」を「教大義」としている、「攘夷はまだこの男の本領であつたのである」とした。しかし『堺港攘夷始末』は、「彼はその敬慕する皇室にも、容堂にも裏切られて、自らの主張する「大義」に殉ぜんとした、とこの七言絶句から、読み取ることができであろう」とする。

箕浦が、「攘夷」という「大義」に殉じ死んでいくという構図だけではなく、箕浦の死が、「皇室にも、容堂にも裏切られ」た政治力学の中の死でもあることを記述する。『堺港攘夷始末』は、箕浦の死における彼の「大義」を否定はしていない。しかし箕浦の死を、「大義」だけによって物語り、一方的に「大義」に回収するようなことはない。箕浦の死は、強いられた死であり、「反抗と自己主張がある」「新政府と容堂への抗議を内蔵している」死という側面もあり、箕浦の死を、堺事件の政治力学的構図の中でもとらえようとしている。

『堺港攘夷始末』は、箕浦猪之吉のフランス水兵に射撃命令を出すという行動と、その死を、複数の側面から物語る。「わが主人公」と称される箕浦ではあるが、箕浦は複数の側面から物語られることにより、かえって箕浦を物語る焦点は、ぼかされる。その結果『堺港攘夷始末』には、箕浦が、堺港においてフランス水兵に射撃命令を出し、フランス水兵を射殺したことにより、切腹処分を受けた、という歴史だけが、動かしがたい事実として存在しているの

である。

註(1) 神戸事件は、慶応四年(一八六八)一月十一日、神戸三宮において、備前藩兵の一部が外国人三名を負傷させた事件。第三砲兵隊隊長瀧善三郎だけが、責任をとって切腹処分となった。『堺港攘夷始末』は、「二 神戸事件」で神戸事件を扱っている。

五

フランス水兵を射殺したことにより、土佐藩士二十名が切腹処分となる。

・箕浦は薄れ行く意識で夷人のおびえるのを見ながら、死ぬよろこびを感じたであろう。

・大石は体軀長大の偉丈夫で、(中略)座に就くとフランス人を睨みつけ(後略)

土佐藩士切腹の場面において、『堺港攘夷始末』は、切腹する土佐藩士の側に、殉国の意識があったであろうことを記述している。しかし『堺事件』が、「介錯人小坂は少し慌てたらしく、西村がまだ右へ引いてあるうちに、背後から切つた。首は三間ばかり飛んだ」「中にも柳瀬は一旦左から右へ引き廻した刀を、再び右から左へ引き戻したので、腸が創口から溢れて出た」と切腹の凄惨さを記述し、フランス人は切腹の凄惨さに怖気づいて遁走した、という「物語」の構図を導き出そうとしていることに対し、『堺港攘夷始末』は、「西村と次の六番隊小頭池上弥三吉は、型通りに一文字に切っただけではあるまいか」、柳瀬の切腹の際「腸が創口から溢れて出た」とすることも、「これは十番の橋詰愛平が現れた時より、フランス人がにわかに恐怖の色を現わした、との記述に合わせたものと疑う余地がある」と記し、切腹は型通り行われたとし、凄惨さを強調することを避けている。

『堺事件』は、フランス水兵十三人を射殺した⁽¹⁾土佐藩士の切腹の席に、日本側からは、新政府外交当局の最高責任者で皇族の山階宮晃親王のほか、東久世通禧、伊達宗城らが臨席、フランス側からは、公使ロッシユが銃を持った兵卒二十余人を随えて臨席していた、と記す。そして切腹が進むうち、「フランス公使はこれまで不安に堪へぬ様子で、起つたり居たりしてゐた。此不安は次第に銃を執つてゐる兵卒に波及した。(中略)丁度橋詰が切腹の座に着いた時、公使が何か一言云ふと、兵卒一同は公使を中に囲んで臨検の席を離れ、我皇族並に諸役人に会釈もせず、あたふたと幕の外に出た。さて庭を横切つて、寺の門を出るや否や、公使を包擁した兵卒は駆歩に移つて港口に走つた」と記す。切腹の席において、ロッシユを始めとしてフランス人たちは、土佐藩士切腹の凄惨さに「不安」を感じ、十二人目の橋詰愛平が切腹の座についた時、とうとう我慢の限界を超えた。そして「我皇族並に諸役人に会釈もせず」という無礼を働きながら、「あたふた」と幕の外に出て、「駆歩に移つて港口に走つた」のである。切腹の席より逃げ帰つたロッシユは、「土佐の人々が身命を軽んじて公に奉ぜられるには感服したが、何分その惨憺たる状況を目撃するには忍びないから、残る人々の助命の事を日本政府に申し立てると云つた」とされ、切腹処分の決まっていた土佐藩士二十名のうち、十二人目橋詰愛平以降の九名の助命が決まる。『堺事件』は、土佐藩士の切腹という命を代償にした行為によって、礼をわきまえぬ無法なフランス人を遁走せしめることができ、皇族は切腹する土佐藩士を見守っていたという「物語」を立ち上げ、堺事件を、その「物語」の構図に回収するように記述している。

しかし、『堺港攘夷始末』は、土佐藩士が射殺したフランス水兵の数は十一人であり、「十一人で止めたのは(中略)応報の数である」ことを記す。ロッシユではなく、実際に土佐藩士切腹の席に臨席したプーチトアールは、「歴戦の海軍軍人」であった。フランス兵も「同胞の復讐の念に燃えて」いた。「二十人の護衛兵の中に動揺が見られていたとしても、プーチトアールは十一に達するまで我慢する勇氣があった」、また「プーチトアールは、フランス水

兵の死者十一人に到るまで我慢していたのであって、十一人目の切腹が再び凄惨になったからではない。十一といふ数は、フランス人が遁走したために生じた数ではなく、フランス側の「応報主義」から生まれた数字である。フランス側はもとも十一人切腹ということ予定し、フランス人には、十一人の切腹に臨席する我慢が備わっており、決して遁走したわけではない。土佐藩士切腹という歴史から、フランスによる「応報」の「物語」の構図が立ち上がってくる。

また『堺港攘夷始末』は、『堺事件』では土佐藩士切腹の席の臨席者とされている人物のうち、前述したようにフランス側は、公使ロッシユではなく、プーチトールであったことを記す。また日本側は、山階宮は臨席せず、東久世通禧、伊達宗城は代理出席、土佐藩士切腹の席の「実務は外国事務局判事五代才助（友厚）が取り仕切った」と記述している。『堺事件』において、薩摩藩出身の五代はその他大勢であり、その名は記されていない。しかし『堺港攘夷始末』は、土佐藩側の記録では「記録しなくなかった」、土佐藩側の記録を典拠とした『堺事件』には記述されることになかった薩摩藩出身の五代の恩——五代が、土佐藩の責任者深尾鼎を説得したことにより土佐藩士九名助命に深く関与したことを記述している。

『堺港攘夷始末』は、土佐藩士九名が切腹を免れて生き残ったことについて、以下のように記す。

ただしこの人間的措置は、生き残った九名に、死者とは別の苦痛を与えることになる。

生き残ったものには、国に殉じた、という「物語」は立ち上がらない。生き残った九名には、「死者とは別の苦痛」を与えられた、という「物語」が立ち上がってくる。

『堺港攘夷始末』は、土佐藩士十一人切腹を、その命を代償にした行為によって無法なる洋夷であるフランス人を遁走せしめた、という殉国の「物語」の構図だけには回収しない。たしかに、切腹する土佐藩士に殉国の意識があっ

たことは否定できない。しかし、フランス側の「応報」、という「物語」も立ち上がる。九名生き残りという歴史を、五代才助との関係から物語ることが出来る。また、九名の生き残った者には、「死者とは別の苦痛」を与えられた、という「物語」も立ち上がってくる。

『堺事件』は、へ無法なる洋夷フランス人を射殺したことにより、土佐藩士は切腹することになった、しかし切腹という命を代償にした行為によって、フランス人を遁走せしめることが出来た、という殉国の「物語」を立ち上げ、堺事件が、その「物語」の構図に回収されるように記述をしている。しかし一貫して、歴史を記述する際、一つの「物語」を立ち上げ、歴史を、その「物語」の構図に回収する記述を持つ歴史小説を批判してきた大岡にとって、『堺事件』の歴史記述は、格好の批判の対象であった。そして大岡は、『堺事件』への批判から「私なりに事件を再現しよう」として、『堺港攘夷始末』を執筆する。大岡は、『堺港攘夷始末』において実際に堺事件を記述する際、様々なレベルの事象から堺事件を記述する。つまり、堺事件を物語ることのできる複数の「物語」を立ち上げ、堺事件が、一つの「物語」の構図に回収されるのを拒否する記述方法を採用。結果として、堺事件を物語る焦点はぼかされ、『堺港攘夷始末』には、堺事件という歴史だけが、動かしがたい事実として存在しているのである。

註(1) 『堺事件』は「フランス水兵の死者の総数は十三人」と記している。これは『堺事件』の典拠となった佐々木甲象著『泉州堺烈拳始末』（一八九四年十一月）の誤謬が踏襲されたからである。

* 本文の引用は『大岡昇平全集』13（筑摩書房 一九九六年一月）、森鷗外『堺事件』の引用は『鷗外歴史小説集』第二卷（若波書店、二〇〇〇年十月）による。

（おぞえ ようへい・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）